

昭和五十七年

## 日本思想史関係研究文献要目

凡 例

一、本要目には、昭和五十七年に発行乃至発表された日本思想史関係の単行本並びに雑誌・紀要論文を収録した。  
一、本要目には、日本思想史関係の学術的な研究を選択収録することを原則としたが、一般読者向けのものも適宜収めた。

一、右のように選択した文献を、Ⅰ単行本目録 Ⅱ雑誌・紀要論文目録の二部に分け、次のように配列した。

ⅠⅡ部とも、文献をその内容によって、総雑・古代・中世・近世・近代に分け、さらにそれぞれに属する思想史関係研究文献を、一般・学問道德教育方面・宗教方面・文芸美術芸能方面・政治社会経済方面・その他の項目順に分類配列した。

単行本は、書名・著書名・発行所名の順、論文は、題名・執筆者名・掲載雑誌紀要巻号数の順に記載した。

一、本要目の作成には、東北大学文学部日本思想史学研究室所属の助手・大学院学生があたった。

一、日本思想史という学問の性格上から、研究文献の選択に迷うことが多く、短時日の間に作成したためもあって、文献の選択や配列に不備な点があるものと考えられる。大方の御教示をお願いする。

I 単行本目録

総 雑

- 日本文化史 第二版
- 道教と日本文化
- 日本国家思想史研究
- 日本 二百年の変貌
- 日本生活思想史序説
- 日本思想史叙説
- 天皇 天皇の生成および不親政の伝統
- 神・人・仏の闘争 さめた目でみる日本宗教史
- 日本の社会と宗教
- 日本文化の型と形
- 古代中世宗教史研究
- 増谷文雄著作集
- 9 日本人の仏教
- 10 親鸞
- 川崎庸之著作集
- 1 記紀万葉の世界
- 2 日本仏教の展開
- 3 平安の文化と歴史

家永三郎	岩波書店
福永光司	人文書院
長尾龍一	創文社
ジャンセン	岩波書店
藤原 暹	ぺりかん社
竹内 整一他	〃
石井良助	山川出版社
臼井史朗	求竜堂
千葉乗隆博士還暦記念論集	同朋舎出版
杉山明博	三一書房
鶴岡静夫	雄山閣出版
増谷文雄	角川書店
川崎庸之	東京大学出版会

古 代

日本古代史講座	井上光貞他	学生社
9 東アジアにおける儀礼と国家		
日本古代神話と氏族伝承	横田健一	塙書房
律令国家と神祇	熊谷保孝	第一書房
聖徳太子と憲法十七条	花山信勝	大蔵出版
古代の齋忌	岡田重精	国書刊行会
日本人の基層信仰	荻野恕三郎	南窓社
古代日本の遊びの研究	宮坂宥勝	筑摩書房
密教世界の構造	中西進	小沢書店
空海『秘蔵宝鑰』	堀池春峰	法蔵館
谷蟻考 古代人と自然	田中元	吉川弘文館
南都仏教史の研究 下		
諸寺篇		
竹取・伊勢物語の世界		
平安初期の思想的考察		
鎌倉仏教史研究	高木 豊	岩波書店
鎌倉新仏教成立論	大野達之助	吉川弘文館
鎌倉仏教雑考	田中久夫	思文閣出版
法然浄土教の研究	坪井俊映	隆文館
伝統と自証について		
中世の真実	阿満利磨	人文書院
親鸞・普遍への道		

日蓮聖人

山川智応

法蔵館

増補版 道元思想

河野憲善

ぺりかん社

日本芸能史

芸能史研究会編

法政大学出版局

2 古代—中世

中世文芸の地方史

川添昭二

平凡社

太平記の研究

長谷川端

汲古書院

中世の再発見

網野善彦

平凡社

市・贈与・宴会

阿部謹也

平凡社

近世

戦国・織豊期の社会と文化

下村效

吉川弘文館

西山松之助著作集

西山松之助

吉川弘文館

1 家元の研究

2 家元制の展開

江戸っ子と江戸文化

伊東多三郎

小学館

増補版 草莽の国学

伊東多三郎

名著出版

近世史の研究

伊東多三郎

吉川弘文館

2 国学と洋学

日本洋学史の研究

有坂隆道編

創元社

中村幸彦著作集

中村幸彦

中央公論社

11 漢学者記事

近世日本の學術

杉本勲

法政大学出版局

実学の展開を中心に

杉本勲

法政大学出版局

吉利支丹論攷

土井忠生

三省堂

徳川初期キリシタン史研究

五野井隆史

吉川弘文館

江戸期の儒学

岡田武彦

木耳社

近世芸能史の研究

竹内道敬

南窓社

歌舞伎と邦楽

子安宣邦

東京大学出版会

伊藤仁斎

宮本又次

文獻出版

町人社会の学芸と懐徳堂

宮本又次

文獻出版

安藤昌益の世界

ザトロフスキー

雄山閣出版

国学者雑攷

丸山季夫

吉川弘文館

本居宣長 補記

小林秀雄

新潮社

本居宣長とその門流

築瀬一雄

和泉書院

藤井高尚の国学

岡山大学附属図書館

岡山大学附属図書館

解説と目録 増補版

阿河準三

後藤芝山先生顕彰会

後藤芝山

阿河準三

後藤芝山先生顕彰会

幕末志士の生活

芳賀登

雄山閣出版

幕府オランダ留学生

宮永孝

東京書籍

幕末の儒学者

横山寛吾

大衆書房

美濃の文人たち

横山寛吾

大衆書房

幕末におけるヨーロッパ学

川尻信夫

東海大学出版会

術受容の一断面

川尻信夫

東海大学出版会

内田五観と高野長英・佐久間象山

小田信士

教文館

幕末キリスト教経済思想史

小田信士

教文館

叢書・日本の思想家

小田信士

教文館

1 藤原惺窩・松永尺五

猪口篤志

明德出版

33 大塩中斎・佐久間象山

小畑常信

明德出版

36 会沢正志斎・藤田東湖

原田種成

明德出版

46 吉村秋陽・東沢瀉

荒木龍太郎

明德出版

日本社会主義運動思想史  
3 一九三一～一九四五

糸屋寿雄

法政大学出版局

近代

日本の近代化と維新

今中寛司編

ぺりかん社

近代日本思想の軌跡

野田又夫編

北樹出版

近代日本の統合と抵抗  
1

鹿野政直編

日本評論社

国家神道と民衆宗教

村上重良

吉川弘文館

近代日本の思想と仏教

峰島旭雄

東京書籍

明治文学と近代自我  
比較文学的考察

小川和夫

南雲堂

私塾 近代日本を拓いたプ  
ライベート・アカデミー

R・ルビンジャー

サイマル出版

大江義塾  
民権私塾の教育と思想

花立三郎

ぺりかん社

岡倉天心考

堀岡弥寿子

吉川弘文館

評伝 清沢満之

脇本平也

法蔵館

土田杏村と自由大学運動  
教育者としての生涯と業績

上木敏郎

誠文堂新光社

白鳥鼎三和尚研究  
明治期曹洞宗の硯徳

川口高風

第一書房

柳田国男  
民俗学への模索

岩本由輝

柏書房

河上肇そして中国  
尽日魂飛万里天

一海知義

岩波書店

鎮魂の糸譜―国家と宗教を  
めぐる点描―

黒田俊雄

歴史学研究  
五〇〇

究のあり方をめぐって

湯浅泰雄

東洋学術研究  
二一

日本思想史における仏教研

堀内操

高千穂論叢  
昭和五六年  
昭和五七年度  
(一)

「日本人論」試論

山本晴義

大阪経大論集  
一四八

日本人の時間意識

田中元

日本大学精神文化研究所・教育  
制度研究所紀要  
一三

やまとだましひの古道論

高橋富雄

理想  
五八四

アイヌ史観確立のための序  
章―エゾからアイヌへ

高橋

中央公論  
九七

仏教文学と口誦伝承

高橋 壮

仏教学  
四

II 雑誌・紀要論文目録

総 雑

戦時期日本の精神史 一九  
三一～一九四五年

鶴見俊輔

岩波書店

日本思想史と戒律仏教

平川 彰

東洋学術研究 二一

福永光司著「道教と日本文化」

佐藤 明

中国哲学論集 八

浄土真宗と祖先崇拜

佐々木 孝

尋源(大谷大) 三三

松田智弘「道教受容の研究」

宮川尚志

東方宗教 六〇

真宗における倫理の問題—とくに掟について—

秦 治人

日本仏教学会年報 四七

古 代

熊野信仰と円城寺

宇野 茂樹

神道及び神道史 三七・三八

言葉よりみた古代日本の生活空間認識—「さと」と「むら」を事例として—

戸 祭 由美夫

『地理の思想』

「ほとけ神」考—習合思想の観点から—

淵 江 文也

中古文学 二九

日本古代の国家と仏教

難波 俊成

私学研修 八九

日本人の住環境意識とその空間—霊山と住環境—

柳 美代子

ノートルダム清心女子大学紀要 生活経営学・児童学・食品・栄養学編 六

「中今」について—日本人の時間意識—

田 中 元

理想 五八四

日本人の宇宙観(試論)—塩と船と墓の習俗構造からみた(下)

桜 井 保之助

論叢(国際商科大) 二七

大化前代の紀年—三—

栗 原 薫

北海道教育大学紀要 第一部B 社会科学編 三三一—

徳川時代の世界観と日本の外交—幕末の一五〇年と満州事変より太平洋戦争開始期に至る一〇年間の二つの危機の時代を比較して、政治と外交の上、徳川時代の伝統的行動様式と思想がいかなる影響をおよぼしたかについての若干の考察—

C・D シェルダ

人文学報(京都大学人文科学研究所) 五三

源経頼の伝記的研究—その公卿学の形成と展開を中心に—

清 水 潔

皇学館論叢 一五一—

職業の思想史

後 藤 文利

商経学叢 二九

呪符木簡の系譜

和 田 萃

木簡研究 四

池田英俊・大浜徹也・圭室文雄編「日本人の宗教の歩み」

宮 本 袈裟雄

日本仏教 五五

陰陽道における典拠の考察—いゝゆる本書・本条・本文の存在意義—

山 下 克明

紀要(青山大・文) 二三

蕃神渡来考—重層的信仰の形成について—

堅 田 修 『日本宗教社会史論叢』

わが国の神仏思想と修験道

村山修一

神道及び神道史  
三七・三八

古代に於ける穢の諸相

大垣豊隆

神道宗教一〇六

日女命(ひるめのみこと)  
|| 卑彌呼の表記と復源

菟田俊彦

神道及び神道史  
三七・三八

魏・西晋朝短里の方法 | 下  
| 中国古典と日本古代史

古田武彦

文芸研究一〇一

出雲国造神賀詞の淵源

井上 實

神道学 一一二  
古代史の研究四

日置部と浄火について

三分一 貴美子

神道学 一一五

應神天皇と気叱大神の名前  
交換伝承について | 神功皇  
后及び武内宿禰伝承を通  
しての考察

伊野部 重一郎

風俗 二一—三  
中央史学 五

平安中期の吉田神社につい  
て

並木 和子

中央史学 五

撰関家と天神信仰

〃

中央史学 五

「法華義疏」筆者試考

中島 壤治

国学院大学紀要  
二〇

「上宮皇太子菩薩伝」につ  
いて

飯田 瑞穂

中央大学文学部  
紀要 一〇四

『日本書紀』の「沙門」記  
事編纂 | 孝徳・斉明・天智  
紀を中心に

新川 登亀男

日本歴史四一三

「法華滅罪之寺」と提婆品  
信仰

曾根 正人

史正 一二

律令国家と行基 | 「疎外」  
としての行基問題

福岡 猛志

歴史学研究  
五〇〇

行基の思想基盤について

吉田 靖雄

ヒストリア九七

行基の活動における民衆参  
加の特質 | 都市住民と女性  
の参加をめぐる

勝浦 令子

史学雑誌  
九一—三

『日本靈異記』と優婆塞・  
優婆夷(上) | 奈良朝仏教  
における優婆塞(夷)の  
位置

魚尾 孝久

年報(大正大・  
総合仏研) 四

最澄・徳一論争と蝦夷問題

宮原 武夫

小山市史研究四

最澄の円密観について

安倍 宏一

史友 一四

最澄と神道

鶴岡 静夫

神道及び神道史  
三七・三八

空海思想の課題

玉城 康四郎

理想 五九四

空海と国家 | 空海の宗教思  
想にみる国家観

中谷 弘光

論集(愛知県立  
大・文) 三一

空海の解釈学

津田 真一

理想 五九四

入唐前後の空海 | その儒道  
二教観の基礎的考察

波戸岡 旭

国学院雑誌  
八三—一一

弘法大師と社会倫理 | 「三  
教指帰」を中心として

田中文 盛

日本仏教学会年  
報 四七

弘法大師の入定説話の研究  
(第二部)

松本 昭

学苑 五〇六

「即身成仏」思想の検討 |  
特に「六大」説を中心と  
して

苦米地 誠一

智山学報 三一

性空上人と『秩父順礼之縁  
起』

橋本 直紀

千里山文学論集  
二七

源信教学における称名念仏  
の意義

和田 慈照

竜谷教学 一七

元慶寺と庶民信仰 | その  
歴史と庶民信仰

吉田 敏幸

日本美術工芸  
五二—二

元慶寺と庶民信仰二―納骨とその容器―納骨五輪塔	藤沢典彦	日本美術工芸 五二二三
元慶寺と庶民信仰三―印仏―その様態と思想	内田隆子	〃 五二四
元慶寺と庶民信仰四―写経とその信仰	稲城信子	〃 五二五
即位の構造(上)―記紀の世界を中心として	平野孝國	神道学 一一五
大嘗祭儀式文の成立	所功	『神道文化会創立三五周年記念論文集』(研究編一)
大王就任儀礼の原形とその展開―即位と大嘗祭	岡田精次	日本史研究 二四五
神祇令集解相嘗祭条の検討	高嶋弘志	続日本紀研究 二二四
新嘗祭班幣の成立	黒崎輝人	日本思想史研究 一四
諸国一宮制の展開	伊藤邦彦	歴史学研究 五〇〇
僧綱制の変質と惣在庁・公文制の成立	牛山佳幸	史学雑誌 九一一
僧尼令に関する諸問題―井上光貞論文の批評を中心として	吉田一彦	紀尾井史学 二
蔵国分寺の造営運動	宮城洋一郎	竜谷大学仏教文化研究所紀要 二〇
八・九世紀における東北辺境の宗教政策	竜谷大学仏教文化研究所	〃
称徳朝の仏教政治(遺稿)	高取正男	史窓 三九

神話資料としての旧事紀・祝詞	鎌田純一	別冊 国文学 一六
日中両国歴史思想の比較―特に神話と歴史との関係について	夜久正雄	紀要(重細重大・アジア研)九
日本書紀から続日本紀へ―中国の修史思想と関連して	松木裕美	紀要(東京女学館短大) 四
日本書紀、続日本紀と中国編年体史書―二、三の問題をめぐって	〃	国学院雑誌 八三一―一
ヤマトタケル伝承の成立―二・三―	松前健	立命館文学 四三九―四四三
『万葉集』における無常観の形成	末木文美士	東洋学術研究 二二―一
柿本人麻呂における持統朝・序説―吉野從駕の歌を中心に	吉田義孝	文学 五〇―九
山上憶良と仏教(序論)	西森真太郎	私学研修 八九
憶良考序説―筑前守以前	大久保廣行	国語と国文学 五九―一一
大伴旅人と老莊神仙思想	大星光史	文学 五〇―四
『日本靈異記』の歴史的性格	真中幹夫	歴史学研究 五〇〇
熊野三山と物語文学の祖型―水における再生の原理	永藤靖	文学研究 明治四七
「源氏」における宗教状況(源氏物語―三―)	佐伯彰一	文学五〇―一一
源氏物語における習合思想	丸山キヨ子	文学研究(日本文芸研究会) 一〇〇

源氏物語と仏教  
丸山 キヨ子  
季刊文学・語学 九三

「源氏物語」と法華八講  
甲斐 稔  
風俗 二一—三

求道と救済(紫式部—源氏物語論への回路)  
増田 繁夫  
国文学 解釈と教材の研究二七

天皇の逸話の扱い方からみた大鏡作者の「歴史記述の態度」  
松本 治久  
紀要(武蔵野女大) 一七

信西の天文道について—「今鏡」人物伝  
山内 益次郎  
皇学館論叢 一五—三

梁塵秘抄と絵解き説話  
渡辺 昭五  
芸能 二四—一

来迎美術史研究序説—「阿弥陀来迎図の成立」その思想的背景  
中村 興二  
仏教芸術一四四

阿弥陀来迎図の成立—法華寺阿弥陀三尊図の本尊  
〃  
〃 一四五

横田健一著『日本古代神話と氏族伝承』  
吉井 巖  
古代文化 三四—一二

中世

中世における道の思想  
渡部 正一  
日本思想史学 一四

中世日本人の地理空間と東寺  
武藤 直  
『地理の思想』

年中行事にみる鎌倉府—正月  
田辺 久子  
神奈川県史研究 四九

中世—揆史研究によせて—講座『一揆』読書会より  
湯澤 典子  
遙かなる中世五

慈円再論—中世歴史思想の比較の試み補論  
北嶋 繁雄  
愛知大学文学論叢 七〇

老荘思想と「徒然草」—第三十八段と「史記」老荘申韓列伝との関係から  
山崎 真也  
二松学舎大学人文論叢 二三

「竹馬抄」にあらわれたる斯波義将の思想—南北朝争乱期における軍人政治家の教育  
布川 尚志  
政治経済史学 一八九

後北条氏と源平交代思想  
佐藤 和夫  
〃

『神皇正統記』神代巻の構成と意図—天瓊矛神話を中心として  
名波 弘彰  
論叢(寺小屋語学・文化研) 一

室町時代における足利学校の意義  
川瀬 一馬  
書誌学 二九

中世の忌日  
佐野 知三郎  
史迹と美術 五二—六

源頼朝と八幡大菩薩  
橋口 晋作  
鹿児島県立短期大学紀要(人文・社会) 三三

中世仏教神道における梵天王思想  
上妻 又四郎  
論叢(寺小屋語学・文化研) 一

鎌倉初期における禅宗成立の史的意義  
船岡 誠  
宗学研究(駒沢大学曹洞宗宗学研究所) 二四

本地垂迹説の展開をめぐって—神本神迹説から神本仏迹説へ  
高藤 晴俊  
神道学 一一三

法然浄土教の倫理性  
高橋 弘次  
日本仏教学会年報 四七

法然の思想における念仏と戒律の關係  
小原 仁  
北大史学 二二



悪人正機説の成立について —1—特に法然と関連して 教行信証と浄土文類聚鈔— 広略二典の比較研究	矢田了章	真宗学 六五	身延山晩年における日蓮聖 人—弘安四年正月から八月 まで	上田本昌	懐神(身延山短 期大学) 五四
浄土文類聚鈔の一考察	普賢晃寿	〃 六六	初期日蓮教団における国家 と仏教—日像を中心として	佐藤弘夫	日本文化研究所 研究報告(東北 大) 一八
親鸞の太子観とその構造	秀野大衍	界女子短期大学 紀要 一八	鎌倉仏教における社会倫理 の一断面—法然と明恵の対 比を通して	梅庭昭寛	日本仏教学会年 報 四七
仏陀と親鸞	名畑崇	大谷学報 六二—一	明恵の捨身行と言葉	野村卓美	日本文学 三一—四
親鸞聖人と関東の門弟—聖 人の在関時代を中心とし て	玉城康四郎	竜谷教学 一七	証空浄土教における社会倫 理	君野諦賢	日本仏教学会年 報 四七
関東門侶の疑義	宮崎円遵	〃	一遍上人の原像小考—『一 遍聖絵』に見られる古代 的伝承などをめぐって	梅谷繁樹	国際仏教大学紀 要 一四
「正法眼蔵」における有・ 無・不・非について	桐溪順忍	〃	初期真宗における本尊論の 一考察—特に先徳像の扱い に関して	藤沢正徳	竜谷教学 一七
「正法眼蔵礼拝得髓」の構 造	新野光亮	宗学研究(駒沢 大学曹洞宗宗学 研究所) 二四	真宗教説の社会的機能—親 鸞の倫理思想をめぐって	嬰木義彦	日本仏教学会年 報 四七
道元—下—(遺稿)	安良岡康作	専修人文論集 二九	真宗の講・寄合	北西弘	『日本宗教社会 史論叢』
道元禅師における社会倫理	守本順一郎	季刊科学と思想 四四	中世真宗教団の制禁及び掟 について	青木馨	『日本宗教社会 史論叢』
道元と如浄—8—「如浄禅 師語録」到来を中心に	東隆真	日本仏教学会年 報 四七	浄土教信仰と非人階層	西田円我	『日本宗教社会 史論叢』
道元の無常観	伊藤洋一	文経論叢 一七—三	中世禅宗と公案	原田弘道	駒沢大学仏教学 部研究紀要四〇
日蓮上人における衆生済渡 とその機能	加藤健一	日本歴史四〇七	渡会神道形成の一考察	井沢正裕	紀要(国学院大 学大学院) 一三
日蓮の积尊観	上田本昌	日本仏教学会年 報 四七			
	尾崎誠	東洋学術研究 二一—一			

原神道集の編成―三十番神  
信仰をめぐる

福田 晃

立命館文学  
四三九―四四一  
論究日本文学  
四五

「神道集」と神道思想

榎本 純一

新古今歌壇と道元禅師―  
「春は花」一首考

山本 ひろ子

論叢(寺小屋語  
学・文化研)一

中世伊勢神道論における  
神鏡の位相―神道五部  
書と度会家行の著作をめ  
ぐる

山本 ひろ子

金沢文庫研究  
二六九

寶基本記について

太田 晶二郎

日本民俗学  
一四三

修験者の妻帯起源伝承をめ  
ぐる―昔話「夫婦の因縁」  
の中世的展開

勝田 至

鷹陵史学 八

中世の太子信仰と神祇―醍  
醐寺蔵「聖徳太子伝記」  
を中心にして

今堀 太逸

鷹陵史学 八

中世の鎮守神信仰と北野天  
神

〃

平家物語の仏教思想  
草版平家物語をめぐる

謡曲修羅物に現れた仏教思  
想

間中 富士子

「沙石集」の位置  
中世の太子伝を通して見た  
一、二の問題(2)―所謂朗詠  
注を介して、些か盛衰記  
に及ぶ

室町公家衆と浄土宗―藤原  
勸修寺流を中心として

西田 円我

鷹陵史学 八

蓮如における信仰構造の研  
究―無常説を中心とし  
て

山崎 龍明

鎌倉時代の浄土教絵画―そ  
の多様性について

室町時代京都日蓮教団と貴  
族

糸久 宝賢

紀要(日蓮教学  
研) 九

大燈国師の一側面

竹貫 元勝

説教と絵解―特殊念仏結社  
に於ける庶民教化の一断  
面

新古今歌壇と道元禅師―  
「春は花」一首考

松尾 玄有

宗学研究(駒沢  
大学曹洞宗学  
研究所) 二四

寺社縁起の世界

五来 重

国文学 解釈と  
鑑賞 四七―三

村落社会と社寺縁起―方法  
への反省をこめて

桜井 好朗

中世神話としての社寺縁起  
―「神道集」―「三島大明  
神」を中心にして

古橋 信孝

物語りする絵解きと社寺縁  
起―その絵画形態と「当麻  
寺縁起」のこと

徳田 和夫

平家物語の仏教思想

今成 元昭

平家物語と宣教師たち―天  
草版平家物語をめぐる

村上 学

「沙石集」の位置

松下 道夫

日本歴史四一

中世の太子伝を通して見た  
一、二の問題(2)―所謂朗詠  
注を介して、些か盛衰記  
に及ぶ

牧野 和夫

東横国文学一四

「宗湛日記」の世界―  
―神屋宗湛と茶の湯―

小沢 富夫

日本思想史学  
一四

鎌倉時代の浄土教絵画―そ  
の多様性について

中村 興二

金沢文庫研究  
二六九

説教と絵解―特殊念仏結社  
に於ける庶民教化の一断  
面

菊池 武

国語国文  
五一―九

国家概念の再検討―日本中世国家論の予備的考察	長坂 伝八	研究と評論二九	井上鋭夫著「山の民・川の仰―日本中世の生活と信仰」	橋本 鉄男	日本民俗学 一四〇
朝家・皇家・皇室考―奥野博士の御批判にこたえる	黒田 俊雄	日本歴史四〇六	北西弘著「一向一揆の研究」	金 龍 静	史学雑誌 九一―一〇〇
鎌倉幕府の社寺修理造営と守護	平泉 隆房	皇学館論叢 一五一―一六	我妻建治著「神皇正統記論考」	多賀 宗 隼	史学雑誌 九一―一一
御成敗式目の法形成	河内 祥輔	歴史学研究 五〇九	土田誠一著『伊勢神道と吉川神道』	白 山 芳太郎	神道史研究 三〇―一二
勸進の体制化と中世律僧―鎌倉後期から南北朝期を中心にして	松尾 剛次	日本史研究 二四〇	伊藤唯真著「浄土宗の成立と展開」	平 雅 行	史林 六五―一
誓約の鐘―中世一揆史研究の前提として	峰 岸 純夫	人文学報(東京都立大学)人文学会 一五九	平田俊春博士の『神皇正統記の基礎的研究』	野 口 武 司	神道学 一二四
中世イエ研究前進のための試論(上)	飯 沼 賢司	民衆史研究二三	黒田俊雄「神社勢力」	今 井 雅 晴	歴史学研究 五〇〇
中世の妻女と後家と後家尼	高 木 豊	月刊百科二四〇	今井雅晴著「時宗成立史の研究」	高 野 修	日本仏教 五四・五五
「闖取」についての覚書―室町政治社会思想史の一試み	瀬 田 勝 哉	武蔵大学人文学会雑誌 一三	近 世	倉 田 康 夫	日本学報 一〇
源経頼の伝記的研究(中―その公卿学の形成と展開を中心にして)	清 水 潔	皇学館論叢 一四―一六	日本近世封建社会における朱子学と韓国(李朝時代)の關係―その文化的意義と交流を中心にして	林 由紀子	歴史と地理 三二八
今川了俊の対外交渉	川 添 昭 二	九州史学 七五	近世武家の家のあり方―家とその承継	源 了 圓	日本文化研究所(東北大)研究報告 一八
玉村竹二著『日本禅宗史論』上、下之一、下之二	今 枝 愛 真	史学雑誌 九一―一九	近世前期の剣法論における「心法」の問題	W・スカイヤ	軍事史学 一七―四
			武士道―「葉隠」の観点から見た死生観と主従關係		

「心学五倫書」再考 石毛 忠 神道及び神道史 三七・三八

近世易学受容史における驚峰点「易经本義」の意義 村上 雅孝 文芸研究一〇〇

山崎闇齋と保科正之 近藤 啓吾 神道史研究 三〇—四

垂加神道と『神皇正統記』との関係 平泉 洸 神道史研究 三〇—四

垂加草の開板 近藤 啓吾 神道史研究 三〇—二

『垂加中訓』と『風水草』との間 谷 省吾 神道史研究 三〇—四

心神考—三輪大神と山崎闇齋 近藤 啓吾 金沢工業大学研究紀要 B・六

水戸藩における崎門学者の貢献 名越 時正 神道史研究 三〇—四

谷秦山著『粟弾劄記』管見 吉崎 久 神道史研究 三〇—四

垂加派における師道の一考察—谷川士清の場合 佐々木 望 神道史研究 三〇—四

山鹿素行の学校論に関する考察—三— 松野 憲二 明星大学研究紀要 人文文学部一八

山鹿素行の心性論 前田 勉 日本思想史学 一四

熊沢蕃山—上—(遺稿) 守本 順一郎 季刊科学と思想 四六

熊沢蕃山の教育と政治—学政一致の思想と構造— 沖田 行司 人文文学 一三七

蕃山農兵論における「無欲」の社会 遊佐 教寛 史泉 五七

熊沢蕃山と幕閣—三— 宮崎 道夫 政治経済史学 一八八

伊藤仁斎の「仁」について 小寺 正一 京都教育大学紀要・A、人文・社会 六一

伊藤仁斎の「伝統」—聖人の道と歌道・神道— 大谷 雅夫 文学五〇—一〇

西川如見の儒学思想 柳 沢 南 日本思想史学 一四

室鳩巢と蘆野東山について 水沢 澄子 斯文 八五

本朝軍器考の成立と安積澹泊 荒川 久壽男 史料(皇学館大) 五二

徂徠年譜考—「太平策」「政談」の執筆年代推定を中心に— 平石 直昭 法経研究(千葉大) 一一

荻生徂徠における「道」—日本における「責任」の概念—三— 藤田 藤雄 創価経営論集 六一—

音楽・神主と徂徠学—藪慎菴・安積澹泊との往復書簡をめぐって— 田尻 祐一郎 日本思想史研究 一四

荻生徂徠の論語観 末永 恭彦 論叢(寺小屋語学・文化研) 一

徂徠学の論理と構造 相見 英咲 思想 六九七

荻生徂徠の「大学」解釈 沢井 啓一 フィロソフィア 七〇

人情不変—徂徠学の基底にあるもの— // 論叢(寺小屋語学・文化研) 一

本多猗蘭侯と荻生徂徠 中田 勇次郎 論集(大手前大) 一六

徂徠から宣長へ	桑野敬仁	日本文学 三一—五	林良斎の「論語」解釈—五	木南卓一	帝塚山大学論集 三六
海保青陵と京都における医学の展開	大島英夫	季刊日本思想史 一八	藤田東湖の思想—「弘道館記述義」を中心として	鈴木暎一	日本歴史四—三
長州藩における海保青陵経済論の受容—文政期「萩藩」開発論の基調と背景	北山健	研究紀要（山口県文書館） 九	会沢正志斎の『新論』（一）	長尾久	紀要（相模女大） 四五
「解釈」の成立—皆川淇園の開物学について—	桜井進	日本思想史学 一四	横井小楠の政治意識	板垣哲夫	史学論集（山形大） 二
皆川淇園の周辺Ⅱ	高橋博巳	研究紀要（宮城工専） 一八	幕末期越前藩政改革路線に關する一考察—横井小楠「国是三論」をめぐって	高木不二	三田学会雑誌 七五—三
江戸後期の知識人社会に見られる新しい道徳と感覚—寛政以後の漢学者たち	中村真一郎	文学五〇—一〇	「学校問答書」における「人才」と「政事」—横井小楠の政治思想（一）	内藤俊彦	法政理論（新潟大） 一五—一
森田節齋と齋藤拙堂—節齋の「與齋藤有終書」を中心にして	宮村千素	皇学館論叢 一五—六	われ聖賢におもねらず—吉田松陰の「講孟余話」—上—	野口武彦	文学五〇—二
『日本外史』研究の方向試探	頼惟勤	斯文 五八	下—	〃	〃 五〇—三
大塩平八郎の思想と行動—三—「洗心洞劄記」の理念とその実践	山県明人	政治経済史学 一八八	幽室及び松下村塾における教育とその一考察—吉田松陰の教育像（その二）	吉村忠幸	紀要（札幌大・教養） 二〇—B
政治結社の私塾の先駆—洗心洞塾の場合	海原徹	人文（京都大学教養部） 二八	志士の思想形成（上）—萩時代の吉田松陰	露口卓也	文化史学 三八
生田正庵小伝	荒木見悟	中国哲学論集八 千葉県の歴史 二三	吉田松陰の思想にみる生と死への取り組み	東中野修	紀要（垂細垂大・教養） 二五
太田和齋の思想と教育	田中治衛	千葉県の歴史 二三	吉田松陰の教育実践と思想・その六	村田甚吾	紀要（帝塚山短大・人文・社会）
幕末御儒者のキリスト教観—安積良斎「洋外紀略」に見る	山本幸規	キリスト教社会問題研究 三〇	吉田松陰研究（Ⅱ）—「転向」以前の民衆観について	栗田尚弥	紀要（明治大院） 一九

孟子の禅讓放伐思想と吉田松陰の「同と独」の思想

東中野 修

紀要(亜細亜大・アジア研)九

近世後期における祭政一致理念の創出

平田 厚志

竜谷大学仏教文化研究所紀要二〇

幕末転換期の士道

小池 喜明

紀要(東洋大・教養)二一

幕末における「宗教」と「歴史」——大國隆正における宗教論と歴史論との関係をめぐる

玉 懸 博之

東北大学文学部研究年報三一

本居宣長における宗教と国家

尾藤 正英

思想 六九四

幕末国学と「外ツ国」——知るゝかぎりは知べきなり

桂 島 宣弘

立命館史学 三

宣長神学の構造——善悪観を中心に

東 より子

思想 六九七

近世奉幣使考

高 埜 利彦

歴史学研究 五〇〇

本居宣長における「道」——上つ代の道——日本における「責任」の概念——四——

藤 田 藤雄

創価経営論集 六一二

尾張藩神官の服忌令研究——吉見幸和の「類聚服假令拙解」その他について

林 由紀子

愛知女短大研究紀要 一六

本居宣長と自然科学——徳川時代における自然科学の種類々相

石 田 一良

文明(東海大) 三五

黒田直邦の「鳴鶴鈔」に就て

小笠原 春夫

神道宗教一〇七

宣長『排蘆小船』の論理構成——「人情」論を基底に

山 下 久夫

季刊日本思想史 一八

伊勢と鈴門

中 村 一基

岩手大学教育学部研究年報 四二一

藩校と鈴門——本居派の藩校について

〃

〃 四一一二

蘭学成立の思想的前提とその歴史的意義について——杉田玄白を中心に

山 崎 彰

『日本洋学史の研究』 六

市川匡に就て——「まがのひれ」前後の足跡

小笠原 春夫

神道及び神道史 三七・三八

三浦梅園と山片蟠桃

高 橋 正和

日本思想史学 一四

平田篤胤の仏教批判——廢仏毀釈とのかかわりについて

芳 賀 登

日本仏教 五四・五五

三浦梅園の天文学的知見

吉 田 忠

日本文化研究所研究報告(東北大) 一八

平田篤胤の学問の社会的基礎——江戸の民俗的風俗的事実との関連を中心として

〃

歴史人類 一〇

三浦梅園の宇宙像と安永四年本『玄語』の改訂について

岩 見 輝彦

フィロソフィア 七〇

生田萬の尊皇思想

中 山 廣 司

神道学 一一四

司馬江漢『天地理譚』

菅 野 陽

『日本洋学史の研究』 六

司馬江漢雜考—一二・一三 ・一四・一五—	中野好夫	新潮 七九—一六 ・八・一一・一二	キリスト教と徳川幕府—造 物・主宰神の觀念をめぐ る神・儒・基の交渉（日 中歐の文化交渉）と幕藩 体制の成立と崩壊	石田一良	文芸研究一〇〇
司馬江漢の画論	小堀一正	ヒストリア九七	「コンサリチン」之大意訳一 名梅罪説略」についての考 察	太田淑子	キリスト教史学 三六
山片蟠桃の宇宙論について	有坂隆道	『日本洋学史の 研究』 六	不干齋ハビアンの神代紀批 判	海老沢有道	日本歴史四〇五
杉田成卿について	石井孝	史友 一四	鈴木正三の「出家」につい ての問題点—とくに思想形 成に関する覚え書として	奥本武裕	仏教史研究一六
佐久間象山『増訂荷蘭語彙』 の小察	杉田つとむ	日本歴史四一五	江戸仏教の特質—3—沢庵 の人と思想	高神信也	智山学報 三一
幕末維新期の佐賀藩におけ る西欧技術の受容と対応— 佐野常民の事蹟を中心とし て—	菊浦重雄	研究報告（東洋 大・経済研）七	近世初頭日蓮宗の説教につ いて—靈鷲院日審の説教を 中心として	伊藤慎一	日蓮教学研究 所 九
在村蘭方医の一樣相—三河 国額田郡本宿村宇野氏の 場合	田崎哲郎	愛知大学文学論 叢 六九	不受不施派の世・出倫理に ついて	宮崎英修	日本仏教会年 報 四七
谷景命『種痘弁』をめぐつ て—幕末大和郡山における 種痘普及の動向とその意 味	浅井充晶	『日本洋学史の 研究』 六	横井金谷伝の一研究—特に 浄土宗侶としての活動を 中心として	藤堂恭俊	『日本宗教社会 史論叢』
石田梅岩著『齊家論』に展 開される「儉約」の教育理 念について	荒木三恵	人間研究 一八	真宗門徒と民俗宗教—幕末 における近江堅田門徒の 場合	佐々木孝正	〃
大阪町人学の流れ	中村浩	歴史評論三九三	妙好人の回心経験をめぐつ て	寺川幽芳	人文論叢（京都 女子大学人文学 会）三〇
二宮尊徳と石田梅岩の産業 教育の特質—總括的所見を そえて—下—	戸田正志	神戸学院経済学 論集 一三一—四	独庵玄光をめぐる諸問題— 2—その発想の基盤につい て	永井政之	宗学研究（駒沢 大学曹洞宗宗学 研究所）二四
石川丈山年譜稿上（二）	小川武彦	紀要（跡見女大）			
上田秋成における「私」— 狂蕩と無信	山田隆信	季刊日本思想史 一八			
広島藩御用絵師山野俊峯齋 守嗣と狩野派	石川哲也	芸備地方史研究 一三八			

平戸藩に於ける寺院政策と洞門寺院

植村高義

宗学研究(駒沢大学曹洞宗宗学研究所) 二四

織田信長と朝廷

橋本政宣

日本歴史四〇五

「夷千島王」の対朝鮮交渉  
—幕藩制成立以前における

海保嶺夫

地方史研究 三二—六

夷千島・扶桑・朝鮮王国の「国」意識

藩政の展開と国家意識の形成  
—津軽藩における異民族支配と「北狄の押へ」論

浪川健治

日本史研究 二二—七

徳川時代の世界観と日本の外交

C・D・シエルダン

人文学報(京都大・人文研)五三

近世日本における「国益」思想の成立とその展開過程  
—日本型経営理念史の資料として

藤田貞一郎

同志社商学 三四—三

徳川封建体制における国家信用と商人信用—三善庸礼の所説を中心として

吉川光治

青山経済論集 三四—二

近世日本における社会思想への一考察(1)—三浦梅園と安藤昌益を素材に

名越一荒之助

高千穂論叢昭和五七年度(1)

近世後期五島藩における経済思想—藤原友衛「勸行余録」の分析

藤田貞一郎

『地方史研究の諸視角』

大塩事件・天保改革と住友の「家政改革」(上)

中瀬寿一

大塩研究 一四

幕末における民衆支配思想の特質—日本的マキアヴェリズムについて

井上勝生

歴史学研究 五〇—二

幕末民衆の歴史的到達とその意義

佐々木潤之介

信州史学 八

幕末村方指導者の法意識—近世から近代 4 幕末の山論

荻田佳寿子

年報(明大・刑事博) 一三

三河額田郡の「お礼降り」—東海道藤川宿を中心にして

藤井寿一

地方史研究 三二—六

松浦武四郎の「海防策」小考

荒川久壽男

紀要(皇学館大) 二〇

田原嗣郎著『赤穂四十六士論—幕藩制の精神構造』

木村時夫

早稲田人文自然科学研究 二二

上田賢治著「国学の研究—草創期の人と業績」

阪本是丸

国学院雑誌 八三—四

松本滋著「本居宣長の思想と心理—アイデンティティ—探求の軌跡」

永藤武

神道宗教一〇六

小田信士著『幕末キリスト教経済思想史』

塚谷晃弘

国学院経済学 三〇—一・二

宮崎英修編「近世法華仏教の展開」

小野文瑠

日本仏教 五四・五五

木村礎編「大原幽学とその周辺」

林英夫

駿台史学 五六

近代

明治の海舟とアジア—1—勝海舟の日清戦争反対論

松浦玲

世界 四四—三

勝海舟から見た条約改正

〃

〃 四四—四



明治の海舟とアジア—3— 勝海舟の征韓論否認	松浦玲	世界 四四五	日本におけるフランクリン の受容—明治時代	今井輝子	津田塾大学紀要 一四—二
歴史と時間—勝海舟と7年 サイクル	中野泰雄	亜細亜大学経済 学紀要 七—二	平絡敬重の道—井上毅と宗 教	伊藤弥彦	キリスト教社会 問題研究 三〇
日本の祖アーネスト・サ トウの生涯	安藤義郎	経済集志 五二—別二	熊本在藩時代の井上毅	木野主計	日本歴史四〇六
福沢諭吉の学問観—ミル、 バックル、スベンサーの 諸著作へのノートを中心 に	安西敏三	三田学会雑誌 七五—三	明治の論理学—1—清野勉 の論理思想	針生清人	白山哲学 一六
福沢諭吉における民権とナ ショナリズムの形成—『西 洋事情』と『学問のすすめ』 を中心	飯田鼎	〃	『六合雑誌』における井上 哲次郎	沖田行司	キリスト教社会 問題研究 三〇
福沢諭吉における「智徳」 論について—日本近代教育 における『文明論之概略』 の教育史的意義(Ⅱ)	佐伯友弘	研究報告(教育 科学)(鳥取大 ・教育) 二四	留岡幸助研究の視点と方法	土井洋一	研究紀要(大正 大) 六七
明治初期における福沢諭吉 の大分県への影響—中津小 学校の成立過程について	〃	〃	明治社会と留岡幸助のペ タロツチ論—近代日本思想 史における留岡幸助のペ スタロツチ論の意義を探 る	村山幸輝	キリスト教社会 問題研究 三〇
明治前期の「抵抗権」思想 —福沢諭吉と植木枝盛を 中心として	井田輝敏	法政論集(北九 州大) 一〇—一・二	留岡幸助の教育観—巢鴨家 庭学校の実践を中心に	滝内大三	大阪経大論集 一四五・一四六
西村茂樹の初期思想—欧化 と伝統	沖田行司	季刊日本思想史 一八	木下尚江の「転向」をめぐ る覚書	左右田昌幸	龍谷史談 八〇
パリのめぐり会い—西周と 五代友厚はパリで何を語 り合ったのか	蓮沼啓介	神戸法学雑誌 三二—二	中島重におけるラスキ政治 理論の受容	西田毅	キリスト教社会 問題研究 三〇
日本における S. Smiles 「自助論」受容の思想的 研究—1—	藤原暹	Artes liberals (若手大学人文 社会科学部) 三一	柳田国男と天皇制論—大嘗 祭論にふれて	西秀成	歴史の理論と教 育 五五
			大正末期の思想的断面— 柳田国男と伊波普猷	比屋根照夫	沖繩史料編集所 紀要 七
			戦後入柳田学Vの展開と新 国学論の行方	内野吾郎	国学院雑誌 八三—四

最後の北一輝—1—辛亥革命の渦中へ

松本健一 現代の眼 二二—二一

三木清における信仰と哲学

神子上恵群 竜谷大学論集 四二—一

領工作の成功—2—上海占

岡崎正道 日本思想史学 二二—二二

高群逸枝の古代女性史研究の意義について

関口裕子 女性史研究と現代社会 一

北一輝の維新革命論

岡崎正道 日本思想史学 一四

訓導と教導職—日本の近代公教育制度成立期にみられる宗教と教育の関係

山口和孝 教育研究(国際基督教大学学報) 一—A二四

北一輝の国家改造論

清水靖久 季刊日本思想史 一四

島根県下における教導職の活動—続—

藤井貞文 神道学 一一—二

河上肇の「政治学講義」とその前後

清水靖久 季刊日本思想史 一八

教育勅語渙発前における徳育論争

渋谷久子 日本大学精神文化研究要 一—三

高田保馬博士の相対的貧困(乏)論と国民生活論について—近代日本の生活問題研究における高田博士の問題提起と学問的意義

金田良治 学報(天理大) 一—三六

日本近代における「教育勅語」観の諸相と変遷

籠谷次郎 日本史研究 二—四三

西田哲学の「行為的直観」とマルクス主義の実践—上

種村完司 季刊科学と思想 四—三

皇典講究所設立の教育的意義と国学院大学建学の精神

岸本芳雄 国学院栃木短大紀要 一—六

西田哲学における主語と述語の矛盾—自己同一性の論理について

吉野貴好 精神科学 二—二

「明治女学校」に関する覚え書—明治期ロマン主義とキリスト教—続—

藤田美実 立正大学文学部論叢 七—二

和辻哲郎—1—「ニイチエ研究とゼエレン・キエルケゴオル」

饗庭孝男 理想 五—九一

泰西学館について

茂義樹 キリスト教史学 三—六

和辻哲郎—2—「古寺巡礼」と「日本古代文化」

吉野貴好 精神科学 二—二

第一次大戦後の国際新教育運動と日本の教育改造運動—教育の世紀社とその周辺

田嶋一 国学院雑誌 八—三一—一

和辻哲郎—3—「原始キリスト教の文化史的意義」と「原始仏教の実践哲学」

饗庭孝男 理想 五—九一

大久保馨の歴史教育論—その目的論と方法論を中心として

森本直人 史学研究 一—五四

和辻哲郎—4—「風土」

五九四

小河滋次郎の感化教育論

伊東光明 三田学会雑誌 七—五—三

和辻哲郎—4—「風土」

五九四

一柳満喜子の教育観

佐野安仁 キリスト教社会問題研究 三—〇

小原国芳の宗教を探る―1	坪田庸子	弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要 一八	群馬事件前夜における日比教宣の動向について―訴訟事件の主役だった彼の側面	今井幹夫	群馬県史研究 一六
維新の変革と幕臣の系譜・改革勢力を中心(6)   国家形成と忠誠の転移相克	菊地久	北大法学論集 三二―三	紀州民権派の憲法・法律研究と権利運動―猛山学校と実学社を中心として	後藤正人	和歌山大学紀州研究要 二
明治初期の「尊攘運動」の実相―函館在勤ドイツ代弁領事襲撃事件を繞って	田中正弘	国学院雑誌 八三―三	情報環境の成立―日本と一九世紀	吉田光邦	人文学報(京都大・人文研) 五三
最近の自由民権研究の動向―歴科協大会報告を讀んで(大会報告によせて)	河西英通	歴史評論三八四	明治国家建設をめぐる法・国家観の相剋	大橋智之輔	『日本近代法体制の形成』下
大塩事件と自由民権運動―上―「民権百年」によせて、大塩平八郎“像”の再検討	中瀬寿一	季刊科学と思想 四六	近代天皇制国家論についての覚書―5―	小松和生	富大経済論集 二七(三)
ある民権家の体験的監獄論―馬場辰猪の青春とたたかい	上田誠吉	文化評論二六一	近代天皇制の形成過程(6)	下山三郎	東京経大会誌 一二五
福島における自由民権思想と運動の展開	庄司吉之助	歴史評論三九〇	帝国憲法解釈論崩壊史	久田栄正	札幌商大論集 三三
福島自由民権家の政治思想	//	福島県歴史資料館研究紀要 四	小田為綱関係文書「憲法草稿評林」について	稲田正次	『憲政記念館の10年』
福島県三春の自由民権運動―特に正道館の教育について	山下重一	国学院法学 二〇―三	明治20年代の平和運動(1)―日本平和会書記加藤万治小論	佐々敏二	キリスト教社会問題研究 三〇
福島事件と東北会	森田敏彦	歴史評論三九〇	明治初期における婦人参政権運動について	井上馨	中村学園研究紀要 一四
高知県における自由民権運動と教育―土佐民権派新聞の教育関係記事の分析を中心として	千葉昌弘	地方史研究 三二―三	女学雑誌にみる廃娼論とその影響―巖本善治を中心に廃娼の思想―山室軍平『社会廓清論』を中心に	西村みはる	日本女子大学紀要文学部 三一
			民衆史運動と歴史意識―群馬からの報告を中心として	小倉襄二	キリスト教社会問題研究 三〇
				清水吉二	歴史評論三八七

足尾鉍毒事件と農民―土とテクノロジーの矛盾・対立  
東海林 吉了  
『技術の社会史』四

大正デモクラシー期における新潟県思想団体の形成と発展  
荻野 正博  
歴史評論三八一

大正デモクラシーと科学技術―国際社会の流れの中で  
飯田 賢一  
『技術の社会史』四

都市社会事業成立期における中間層と民主主義―大阪府方面委員制度の成立をめぐって  
大森 実  
ヒストリア九七

華士族論と小野梓  
福島 正夫  
早稲田大学史紀要 一五

浮田和民における倫理的帝國主義の形成(1)(2完)  
宮本 盛太郎  
法学論叢(京大) 一一二―一三・四

沢沢栄一の研究(続)―労働問題との関連において  
多田 顕  
大東文化大学経済論集 三三

井上準之助の経済リベラリズム―一九一九年日銀施策についての経済思想的考察  
長 幸男  
『戦間期の通貨と金融』

日本の初期社会主義運動と萬国社会党(1)―点と線に関する覚書  
西川 正雄  
東京女子大学史論 三五

〃 (2)  
〃  
歴史と文化(東京大学教養部) 一四

共産主義派と社会民主主義派の競合と対立―赤松克麿を中心  
松澤 哲成  
東京女子大学紀要比較文化四三

三重県における水平運動の成立  
黒川 みどり  
地方史研究 三二―三三

堺利彦研究序論  
向井 啓二  
龍谷大学国史学 八

山川均における民主主義と社会主義  
伊藤 晃  
千葉工大研究報告人文編 一九

山川主義の歴史的位置  
〃  
〃

初期無我愛運動に対する批判について―小田頼造の場合  
三宅 守常  
日本大学精神文化研紀要 一三

初期社会主義運動家小田頼造の研究(下)  
長江 弘晃  
〃

村落社会主義者小川高之助の思想と行動  
林 彰  
人民の歴史学 七〇

ナショナルリスト・高野房太郎の一面  
大島 清  
法政大学大原社会研究所研究資料月報 二九―一

石原莞爾と最終戦争論―宗教上の信と事実上の真  
清家 基良  
芸林三一―一

近代日本における「大逆」の意識―支配者シンボルの価値の両義性についてを中心とした部分的考察  
竹山 護夫  
『甲斐の地域史的展開』

報告 戦前期の民衆運動からナショナルリズムとファシズムへ主題―「国益」論と思想の立脚点―いまファシズムを考える  
安田 常雄  
思想の科学第七次 一四

〃  
〃  
〃

「終戦工作」と「国体」に関する一試論  
君島 和彦  
東京学芸大学紀要第三部門社会科学 三四

歴史的に見た未解放部落の  
戒名  
成沢栄寿 部落 三四―四

昭和初期の「自由主義者」  
―鶴見祐輔を中心として  
藤野正 日本歴史四一五

近代日本人の倫理観(2)  
堀内操 高千穂論叢  
八九―一〇五

明治初期の宗教意識  
藤井文明 紀要(国学院大  
日本文化研) 四九

近代日本における「信教の  
自由」と「宗教弾圧」  
出口栄二 社会科学討究  
(早稲田大学大  
限記念社会科学  
研究所) 二七―三

一九二〇年代の宗教法案―  
宗教統制をめぐる諸対抗  
赤沢史朗 歴史学研究  
五〇〇

仏教における女性組織の近  
代化―婦人教会の設立運動  
千葉乗隆 竜谷大学論集  
四二―

近代仏教における女性宗教  
者―曹洞宗における尼僧と  
寺族の地位向上  
内野久美子 宗教研究  
五六―二

ファシズム期の一仏教者の  
実践について―妹尾義郎の  
反ファシズム運動を中心  
にして  
吉田静邦 仏教経済研究  
一一

小野梓と仏教  
阿部恒久 早稲田大学史紀  
要 一五

大正期石川県の清沢満之の  
門弟達  
宮本又次 『日本宗教社会  
史論叢』

鈴木大拙の弥陀身土観  
徳永道雄 竜谷教学 一七

姉崎政治の仏教思想  
芹川博道 社会科学討究  
(早稲田大学大  
限記念社会科学  
研究所) 二七―二

近代神社祭祀組織の創設と  
婦結  
米地実 歴史学研究  
五〇〇

神社祭祀行事作法(明治四  
〇年)制定の一考察  
小野和輝 神道宗教一〇六

明治神祇官制の成立と国家  
祭祀の再編―下―  
羽賀祥二 人文学報(京都  
大・人文研) 五一

天理教の乱について  
栗田智 史苑 四一―二

切支丹文献に見出せる虚像  
・実像七―明治期の禱と反  
耶書 其ノ一  
上原袈裟美 論集(四国学院  
大) 五二

宮城県明治期の「破邪書」  
三冊について  
相沢源七 紀要(東北学院  
大・日本文化研)  
二三

天皇制形成期のキリスト教  
―人権問題との関連におい  
て  
土肥昭夫 社会科学(同志  
社大・人文研) 二九

「七一雑報」における神学  
思想―キリスト教と文化  
藤代泰三 キリスト教社会  
問題研究 三〇

「七一雑報」における日本  
基督伝道会社  
茂義樹 〃

警醒社について  
杉井六郎 〃

柏木義門の非戦論―文明観  
の変遷と同時代の非戦主  
義者との比較を中心に  
林達夫 季刊日本思想史  
一八

小崎弘道の『政教新論』に  
ついて  
今中寛司 キリスト教社会  
問題研究 三〇

木村駿吉のことについて

伊沢平八郎

キリスト教史学 三六

「六合雜誌」にあらわれた  
原田助一その近代化倫理に  
触れて

武邦保

キリスト教社会  
問題研究 三〇

「六合雜誌」と浮田和民  
「六合雜誌」と「青年之友」  
における羽仁吉一

尾崎ムゲン

三田学会雑誌  
七五―三

足尾鉞毒事件における潮田  
千勢子―キリスト教の問題  
を中心として

工藤英一

キリスト教社会  
問題研究 三〇

逸見斧吉のこと

土肥昭夫

キリスト教社会  
問題研究 三〇

八浜徳三郎研究序論―明治  
期を中心にして

室田保夫

〃

W・M・ヴォーリズ  
の思想構造―「近江ミッ  
ション」成立期を中心  
に

奥村直彦

〃

湯浅八郎と新島襄との比較

和田洋一

〃

近江八幡市にみられるキ  
リスト教伝道―明治大  
正期を中心として

藤山照英

紀要（仏教大・  
社研） 三

大東亜戦争とキリスト教―  
晩年の渡瀬常吉

飯沼二郎

キリスト教社会  
問題研究 三〇

国木田独歩とキリスト教

鈴木秀子

国文学 解釈と  
鑑賞 四七―八

石川啄木とキリスト教

河野仁昭

キリスト教社会  
問題研究 三〇

日本神話と近代思想―鷗外  
『かのやうに』と芥川龍  
介『老いたる素戔鳴尊』

川副武胤

紀要（人文・山  
形大）一〇―一

大町桂月の思想―そのナ  
ンナリズムの特質につ  
いて

高橋正

学術紀要（高知  
高専） 一八

井上通泰と小野節

兼清正徳

岡山県史研究四  
愛知教育大学研  
究報告人文科学  
三一

平林初之輔とその時代―1  
―大正七年八年

渡辺和靖

鹿野政直・由井正臣編『近  
代日本の統合と抵抗』1

橋本誠一

日本史研究  
二四三

鹿野政直・由井正臣編『近  
代日本の統合と抵抗』2

遠藤俊六

〃

有元正雄、頼祺一、甲斐英  
男、青野春水著『明治期地  
方啓蒙思想家の研究―窪田  
次郎の思想と行動』

土井作治

史学研究一五六

有元正雄、頼祺一、甲斐英  
男、青野春水著『明治期地  
方啓蒙思想家の研究―窪田  
次郎の思想と行動』

ひろたまさき

日本史研究  
二二九

阪本健一著『明治維新と神  
道』

秋元信英

神道宗教一〇六

藤谷俊雄著『神道信仰と民  
衆・天皇制』

桂島宣弘

日本史研究  
二三八

高柳俊一編『近代文学のな  
かのキリスト教』―学際的  
研究の試み

山本浩

ソフィア  
三一―三

山本武利著『近代日本の新  
聞読者層』

小木新造

社会経済史学  
四八―四

小池喜孝著『平民社農場の  
人びと―明治社会主義のロ  
マンと生きざま』

武内善信

日本史研究  
二四三

秋田近代史研究会編「秋田  
県の自由民権運動」  
比屋根照夫著「近代日本と  
伊波普猷」  
鳥海靖著『「明治」をつく  
った男たち』

森田敏彦  
小泉正人  
勝田政治

歴史（東北史学  
会）五八  
日本史研究  
二三九

寺小屋教科書における親子  
道徳の内容について  
内村鑑三における時間と歴  
史  
和辻倫理学の「空」の問題  
——西田哲学の「絶対無」  
との関連において——

尾形利雄  
小原信  
高坂史朗

上智大学教育学  
論集 一五  
青山学院大学文  
学部紀要 二三  
関西学院哲学研  
究年報 一五

補遺

昭和五十六年

日本書紀出典考

榎本福寿

研究紀要（仏教  
大）六五

本朝世紀の成立——大外記師  
遠記および権少外記重記  
との関係について——

平田俊春

麻布大学教養部  
研究紀要 一四

親鸞思想の歴史的評価をめぐ  
って——初期親鸞教団の社  
会的基盤論争をふりかえ  
って——

保井秀孝

仏教史研究  
二四——

三願回転の史料批判——二  
葉憲香氏の反論に答える——

古田武彦

『日本の社会と  
宗教』

親鸞伝研究の基点——『教行  
信証』後序をめぐって

細川行信

〃

『近世往生伝』とその性格

大橋俊雄

〃

近代日本における社会思想  
への一考察——三浦梅園  
と安藤昌益を素材に——

名越二荒之助

高千穂論叢五六

『本期画史』についての二、  
三の問題

笠井昌昭

文化史学 三七





## 発刊の辞

東北大学法文学部の開設とともに、故村岡典嗣氏を初代の主任教授として日本思想史学専攻が設立せられたのは大正十二年のことである。

昭和二十一年春、村岡氏が定年退官せられて後、後任者の得難きままに九年余を経て、昭和三十年に故竹岡勝也氏が就任せられた。しかし竹岡氏も在職二年にして定年退官せられ、一年を経て昭和三十三年に私が両教授の芳蠅をけがすことになった。

本専攻の学部（第三・四年）は「日本思想史学専攻」として文学部史学科に属し、大学院（修士・博士課程）は「国文学国語学日本思想史学専攻」として文学研究科に属している。日本思想史学の独立の講座を基礎として、日本史（国史）専攻、乃至は国文学専攻または倫理学専攻とは別に、独立した「日本思想史学専攻」が設けられているのは、東北大学のみである。

以上の如き本専攻の歴史と現状に鑑み、関係者相い諮って、専攻専属の機関誌として、本誌を刊行し、その研究・教育の状況を学の内外に紹介することにした。大方の御援助を仰ぐ次第である。

昭和四十二年三月

石田一良

### 日本思想史研究 第十七号

昭和六十年三月十五日 印刷  
昭和六十年三月二十五日 発行

編集代表者 玉 懸 博 之

仙台市日の出町二丁目四ノ二

印刷所 (株) 仙台共同印刷

仙台市川内

発行所 東北大学文学部

日本思想史学研究室

